詩篇２９篇の黙想：「神の力と栄光・輝き」（2020 年 5 月 26 日用　TM）

　この詩編は世界の主権者である主なる神を賛美するものであり、賛美への呼び掛け（1-2)、賛美の本体あるいは内容（3-10）という構造で、11 節は賛美に基づく祈りです。「栄光」（kābōwd)、「力」（wā'ōz)、「輝き」（bəhadrat)、そして、7 回繰り返される「御声」（qōwl）の語群が印象的です。また、「響く」「とどろく」（原語にはそのような動詞は不在）は雷鳴を思い浮かべさせます。ルターが修道僧になり、神に献身することを決意したのは、雷に遭遇し、恐怖と神の威厳への混ざり合った宗教的経験によるとされています。避け場のない処で雷に遭遇した場合を黙想してみましょう。

・神の子ら　「神々の子ら」（bənê 'êlîm）は「偉大なる者らの子ら」で、人というより、天上の天使たちの群像への呼びかけでしょう。
・「栄光」ある英語翻訳家と二年間英語聖書を通読したことがありますが、「栄光」「栄光を帰する」（hābū kābōwd　give glory to Yahweh, glorify ）ということが理解できない、日本ではそのような場面に遭遇したことがないと言われたことがあり、「はっと」しました。確かに多神教あるいは世界に神々、いのち（アニマ）が満ちているというような文化の中に生きている人にはそうなのかな、と思わされました。
・ 聖なる輝きに満ちた主　2 節では、「聖なる輝きに満ちる（bəhadrāt qōdeš）主にひれ伏せ」と命じられています。聖性の「輝き」における主は、4 節では御声の「輝き」（behādār）と並行した表現です。「輝き」は詩編 24 編に繰り返し登場したことを覚えていますか？「栄光に輝く王」新共同訳では 7-10 に 5 回登場していましたが、「栄光の王」という言葉だけであり「輝く」はすべて「栄光」の解釈でした。「栄光」だけでは日本語にならず、「輝く」を補足したのでしょう。しかし、29: 1， 2 には hadārā「飾り」という語が登場し。2 節は　the beauty，4 節は　majesty と英訳されます。また、27: 4 の「主を仰ぎ望んで喜びを得」を青木澄十郎が「主の美（bənō'am）を眺め」と翻訳していることも紹介しました。何をもって美しいと考えるか、普遍的に美しいものは存在するのかは美学の基本的問いですが、詩編の中で主なる神に対して「美」という表現が登場することは興味深いですね。
・被造世界の脅威　日本人には被造世界は美しく、調和に満ちたものに感じられるかも知れません。しかし、実際は脅威を与えるものであり、逆に、イスラエルの荒涼とした環境の中にも静かで美しいものがあるのでしょう。被造世界における猛威をふるう力、混沌の象徴である海原での雷鳴、嵐、落雷、地震など、地と水と火と風の激動が描かれています。動かない象徴である山（孫子）が地震で、子牛が跳ねるように躍らされます。雷は、北はヘルモンから、南はカデシュへと移り行きます。「シルヨン」はヘルモン山のフェニキア語の名。レバノン杉（香柏）はレバノン山脈とアンチレバノン山脈に育ちます。このような荒れ狂うものへ恐れと人の力を遙かに超えたものへの感嘆と賛美が入り混じった想いがイスラエル人の経験の根柢にあるのでしょう。それからの現象を神の「声」（qōwl）と語っています。詩のテーマは大自然ではなく、主なる神の顕現です。神の言です。
５．洪水の上にみ座をおく主　3 節で、大水の上にいますと歌われましたが、10 節では再び、崇高な静けさが戻ります。主は、混沌の大水を支配されているのです。地上を脅かす恐るべき出来事や破局の中でもなお信仰者はこの王に頼ることができるのです。ユダヤ教では仮庵の祭りにモーセの十戒を授与された記念としてこの詩編が歌われそうです。